

昭和五十七年三月三日 資料

第一五回

史跡めぐり

築鴨
救橋
地区

筑鴨町郷土研究会

中村忠美

第15回史跡めぐり

1. 日時 3月28日 (日)

1. 集合 越谷駅前 午前8時30分集合

1. 往路 越谷駅発 午前9時4分^{津志}(~~中野行~~)
北千住より~~北千住~~西日暮里 →
→国鉄兼鴨駅下車

1. コース 真性寺 → とげぬき地蔵 → 本妙寺
(遠山金四郎墓) → 慈眼寺 → 庚申塚
晝食(西兼鴨、寺の良)
妙行寺 → 善養寺 → 近藤勇墓 →
→ 東光寺 → 観明院 → 間屋場跡
→ 板橋 → 鷺切り塚 → 智清寺

1. 歸路 都営地下鉄板橋本町駅発 → 兼鴨
→ 西日暮里 → 北千住 → 越谷駅

解散

1. 金費 2200円(交通費他)
但し晝食各自持参のこと

以上

しら露もこぼれぬ萩のうねり哉

芭蕉

萩極てひとり見習ふ山路かな

杉風

藤棚に寝て見てもお江戸かな

茶

1 古代中世の豊島

豊島の入江（原始・古代の豊島）

大昔、豊島区は海に沈んでいた。数万年前のことである。西多摩の山地を除いて東京郡の大半は浅海であった。第三紀鮮新世ネオゲンの地層、三浦層群によってこのことが推定されている。地下一〇メートル以上掘り下げたとき、その地層が現われる。その上に東京層がある。その後、関東山地から押し流された砂礫の堆積がこの層となった。現在の高層建築物の基盤は、すべて東京礫層になっている。浅海中に堆積した東京層は、一端海を退けたが、再び浅い海が広がり、吉祥寺付近を境に武蔵野湾と呼ばれる入海となった。東京礫層はさらに堆積し、海辺を広げ、湾を縮少し、山の手の方面が陸化しつつ、広い海岸平野の一部として豊島区の地形が誕生したのである。

「豊島の入江」と言われる美しいことは、このころの豊島区であつたらうと思う。諸河川は西から東へと流れつつ堆積された砂礫は山の手層を作り、富士山をはじめとする武蔵野を囲む火山の激しい活動で、火山灰を降下させ、風化して赤土となり、関東ローム層となる。そして豊島区は人もなく眠りつづけていた。洪積世から神代世へ移行し、海岸から離れていた山の手台地は海に接し、海水は台地をきざみ、入江を作り潟となり、潟はさらに沼沢や池となり、気温は急に暖くなる。日本列島は大陸と離れ、島国となる。およそ一万年前のことといわれている。こうした環境は、弥生や縄文に適した地となり、やがて次第に人類が住みつくようになる。

マレイ族、アイヌ族など、南方系、北方系など、あるいは太古からの先住民族など、いずれも穴居生活をしてきた。狩猟、漁撈をしてきたものと思われる。紀元前九千年から二千年に至る数千年間のことであろう。いわゆる縄文文化の時代である。池袋氷川神社の東夷と西夷、柴井森地に貝塚が発見されている。また、駒込を含む豊島区の北方に各所から土器、打石斧、間石などが発見されている。おそらく縄文文化晩期のものだろうが、「豊島の入江」時代を裏付けるものとして、これらの遺跡は貴重である。

紀元後二〇〇年と四〇〇年ごろ、いわゆる弥生文化の中期と思われるが、豊島区内にも、そのころのものが伝わる。水稲耕作、紡織の生産技術、金属の労働用具がはいり、ここから豊島区付近も農業社会に突入していくことになる。駒込・巣鴨・池袋の古墳から、弥生式土器、紡錘車、金

環、山玉などが築城されている。弥生後期から古墳時代にはいり、七世紀を遡る。地形は武蔵野段丘の先端、豊島台として標高四〇―五〇メートルを保ち、豊島区は山の平地として集落の敷が次第にふえ、また荒川の土砂の堆積による沖積低地を崖下に見つつ、地形の定着を見る。やがて、そのうちに中・小の豪族が生まれ、次第に大和朝廷の力が波及してくるのである。

むさしの地名と國造（大化改新から平安へ）

五、六世紀のころ「むさし」の名はようやく人々に知られるようになった。大和朝廷の勢力が國造（くにのみやつこ）を通じて及ぶようになってからである。「むさし」が「武蔵」と書かれたのは、八世紀初頭の和銅年間だが、それまでは「牟婁志」「无邪志」などと表記されていた。万葉集では「牟婁志」と書かれているのを見る。

「むさし」はアイヌ語であるともいう。「ムニ（武）、サク（乾いた原野）、ウシ（生い茂る）」。また朝鮮語「ム（われら）・サン（城塞）」の意味から、朝鮮系移民人らのしぶんたちの根拠地と称したという説もある。しかし、「むさし」の語は稲化人の移住以前からみえるところから、そうとも言えない。したがってアイヌ語からきたものが、あるいはあたってはいるかも知れない。

武蔵はおくられていた。大化の改新以前、古墳時代は、武蔵は未開の地であり、武蔵より奥への旅は、海をわたって房総、常陸へ出ていたようである。つまり武蔵はつねに取り残された地域といえる。今に残される古墳の遺跡・遺物を見ると、武蔵地方は、群馬・栃木・埼玉から文化が流入したと思われる荒川流域を中心としたもの。また多摩川流域にみられる集落。そうしたことから、武蔵在住の豪族が二つないし三つ考えられ、そこに國造が定められていたことが考えられる。

九世紀に編纂された「先代旧事本紀」第十卷「國造本紀」に、武蔵付近の國造についての①无邪志國造（成務天皇の世に兄多毛比命を國造に定めた）②阿利國造（兄多毛比命の子の伊弉知直を國造に定めた）③知知夫國造（保神天皇の世に知知夫命を國造に定めた）の三つがあげられている。「新編武蔵風土記稿」でも、无邪志の地域を足立・埼玉両郡に、阿利の地域を多摩郡に想定。それに埼玉泉秩父郡と荒川北岸の北武蔵を知知夫と、やはり三つの國造を推定している。これらの土著、國造は、大和政権の武蔵への進展の足がかりとなるが、豊島区を含む北武蔵の知知夫國造は出雲國造系で、反大和集團の象徴的存在であったとも言われている。いずれにしても、むさしの國造は、地方ごとに独立し、地方的君主として大和朝廷に服属するようになるまでには、かなりの日時がかかったともうである。考えようによっては、ここに武蔵人の後述性を意味しているようにも思える。

武蔵國の管下に二十一の郡が数えられた。「新日本紀」に示されていることから、八世紀中ごろであろう。久良・都波・多麻・橋野・藤原・豊島・足立・新原・入間・高麗・比企・横見・堀玉・大見・別表・橋野・糠沢・那珂・児玉・賀茂・秩父である。東京都に属するものは、このうち、多摩・荏原・豊島の三郡と足立・都波兩郡の一部であり、豊島郡は日頭・古方（古方）、荒瀬・湯島・広岡・余戸・野宮の七つの郷からなっている。これは九世紀前半ごろの地名であるが、中世にはいと混えてしまう。しかし湯島などの地名は今も残っている。

豊島の地名と豊島氏の興亡（平安から中世へ）

大化の改新にはいってまもなく、東国に八人の節司が派遣された。戸籍の作成、租の検査、國邊の整備、兵力の収納など任務の主なものであった。大和政権への統轄が目的である。大化二年（六四六）には調査の結果が報告されている。このとき「豊島」の地名が見える。また万葉集には「止志末」とあり、風土記には「豊島」とある。延喜式の兵部式に「豊島郡」があり、日本紀に、豊島郡に馬十匹、馬五匹を置かれたとある。「延喜式」は一〇世紀初頭に編纂されたが、当時の東海道として、相模の浜世郡（多摩または厚木）から武蔵にはいり、厩屋・小高・大井・豊島の四郡を通過して下野を通越して常陸へは行っていったと想われる。ここで言う豊島郡の所在地は伝えられていないので、推定の域を出ないが、北区内の中里・豊島説、文京区の湯島説、台東区の浅草花川戸説、千代田区内、神田・早川・江戸城付近の説がある。しかしいずれにしても当時の豊島郡内にあつたことは確かであり、豊島の名の古くからあつたことがわかる。ひとくちに豊島郡といっても広い。大日本地理志料に見る郷に含まれる地名は次のように書かれている。

日頭（小台向・小石川・牛込市ヶ谷・金杉・関口・音羽・高田・横間谷・池袋）

古方（箱戸・尾久・町屋・三河島・箕輪・金杉・山谷・山宮・橋場・今戸・浅草）

荒瀬（新原・谷中・上野・下谷・根岸・更木・出端・中野）

湯島（駿河台・神田・根岸・陶込・染井・築橋）

広岡（上練馬・下練馬・石神井・関・中村・田中・谷原）

余戸（柏木・大久保・戸塚・角番・幡ヶ谷・代々木）

野宮（麩町・神田・日本橋）

こう広範囲では、豊島駅はどこに所在しているかわからない。一説に北区の豊島町あたりではないかとも言われているが中世になくなっていくこれら地名を考えて見ると、それもおぼつかない。ただ、東海道から武蔵を経て下総、常陸とつづく公定路線から、大井駅の次に通過する豊島駅だとすれば、浅草と江戸との発達の傾向から考えて、浅草（台東区花月戸）あたりとするのが自然かも知れない。

ともあれ、豊島区史によると、豊島区と命名した理由として、「和名類聚抄」にある日頭と湯島の一部が、のちに北豊島郡内の奥幡、西栗橋、池袋、高田、長崎の各町に別れていたものを合併したので、古代の豊島郡の中心にあたることから、昭和七年の区誕生のとき、豊島区としたと述べている。古代からの「としま」の地名が、今に残されたということは、やはりうれしいものである。

豊島の地名は、中世の豪族、豊島氏によって受けつがれているが、この一族が歴史上に名を残したのは、豊島清光が、広大な荘園を今の東京都の中心地に維持していた当時の実力者であったことによる。

荘園は、律令制度そのものの中に発生をもたらすことになる。口分田と空閑地の私有。國郡司の職田、神田、寺田、陽田、勅旨田など、直隷的な土地の私有。そして封戸（封主である高級貴族、社寺が間接的に私領として支配）に対し、国司が毎年封主に定額を渡すことを怠りはじめたことなど、次第にそこに独立性が生まれ、それが荘園を生む温床となった。また牧（牛・馬の牧場）を管理する土豪を別当としておかれ、年貢に牛・馬を納めさせていたが、これが荘園として発達していった。

開拓期にある武蔵は政府機関への貢進にしてもかなり重いものがあった。それに加えて、強盗・強賊の横行、蝦夷の反乱など、それらの指導者がみな東國の土豪であり、実力あるものが勝つという、そうした新土豪族の台頭が関東の野にあつた。これらはやがて荘園の勢力争いに発展していくことになる。つまり当時の武蔵野の不穏なものが、荘園とそこに住みつく自衛の意味での武士を新しい実力者として育てていくのである。

土豪は土地や兵馬の権を併せ得て、家人を養ひ、部従を育て、武を練り、弓馬の術を磨き方に備えた。この宗家を「弓馬の家」と称え、その庶子の分家を「家の子」といい、一族従者を「家人」と呼び、それに仕えるものを部従といひ、その人数が多数で一同となっているものを「党」と呼んだ。党ごとに旗を立て、旗頭を一族の嫡宗とし、「惣領家」といわれた。これらは武事に従うので「武門武士」とか「武家」というようになった。

武蔵野の武士団で中央政府から派遣されたものに、源氏と平家の二門があつた。そのほか、在地土豪の実力者に武蔵七党といわれる武士団があつた。

武蔵守になった筑前氏は嵯峨天皇から出た源氏の子孫であり、この地に永住する。平氏は桓武天皇から出た高麗王が上總介となり平の姓をもらい東國にくだり、その子らが各地の豪族となる。なかでも五男良文は荒川の水利によって土地を拓き、数百の家人郎従を養い、関東に名をとどろかせ、武蔵大將に任ぜられる。良文の孫常常は、治安三年（一〇二三）に武蔵介の藤原源成の反乱を豊島村の村里に戦り、これが秩父氏を名のる武蔵平氏の祖といわれている。

豊島氏は平氏から出た秩父氏の一族であり、葛西氏、江戸氏、河越氏、島山氏などと同じである。秩父六郎将常の子で秩父別当武基の第二郎武常が、始めて豊島氏を名のったといわれている。その子の太郎直義は鎮守府権軍源義家に仕え、その弟の二郎常家の孫が清光となる。大要、次のような系図になる。



清光は、源頼朝率兵にその旗下に参じたことが「吾妻鏡」にみえる。石橋山の戦いに破れた頼朝は、海路安房に逃れ、再び兵を集めて房総半島を北上し、隅田川を渡って武蔵國にはいったとき、彼ははせつけることになる。治承四年（一一八〇）十月二日の条に次のような一節がある。

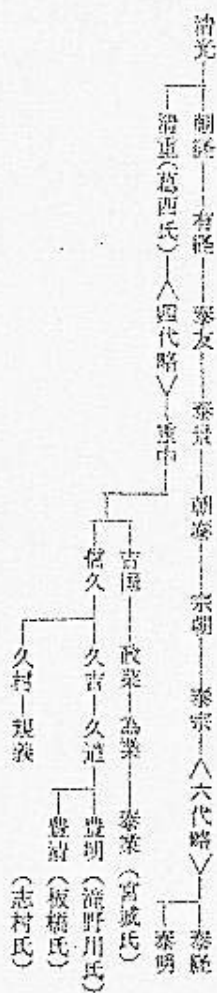
「習兵三万余騎武蔵國・豊島權守清光、葛西三郎清重等最前参上。」

「新編武蔵風土記稿」に「按ずるに清光が館は豊島郡救島村」とあるが、その本拠地、館のあったあたりについて二説ある。一つは北区豊島町清光寺、他の一つは北区中里の平塚神社付近である。おそらく地形から考えて平塚神社付近が中世豪族の居館地として適當ではなかったかと思ふ。ここは西方滝野川・東鴨・鞍馬へ続く台地を、西ヶ原、駒込の窪地で一応独立した地点であり、東は、十五ノートルカ二十ノートルの断崖をもって荒川流域の低地につづく。そして北は石神井川の峡谷がある。これに比して清光寺は、隅田川西岸の低湿地帯で立地条件もよくない。

頼朝の武蔵入國の際参上した豊島清光は、その後も奥州征伐などに従軍している。清光が創建したといわれる清光寺（北区豊島七丁目）には、清光の座像（江戸時代のもの）がある。彼の第三子三郎清重は、葛西姓をつぎ、頼朝に信託され、奥州藤原氏滅亡後は、奥州継平行までになっている。

朝敵系下の人々が豊島氏の宗家であった。清光の長子朝経(豊西三郎清重の兄にあたる)の四代の孫に、三郎兵衛泰景というのがいた。この時代になると、豊島村の平塚城(北区上中里、平塚神社付近)から、練馬城(練馬区、豊島園内)、石神井城(練馬区三笠等池と石神井川にはさまれた丘陵)と所領も広がってきた。そして、宮城氏、滝野川氏、志村氏、板橋氏の諸流を分出し石神井川下流南岸一帯の地を中心として豊島氏一族の勢力は安定していた。その略系図は、諸系図をあわせ見ると、ほぼ次のようになる。

豊島氏略系図



長祿元年(一四五七)十二月、將軍義政は弟の政知を伊豆彌越(静岡県田方郡藤山町)に縁遊した。世に彌越公方という。

山内上杉氏では、文正元年(一四六六)当主の房嗣が武蔵五十子(埼玉県水庄市)で戦死し、幕府は越後守護上杉房定の子嗣定にあとを継がせた。家宰は長尾景信であった。

扇谷上杉氏(直胤の宗家)では当主の持朝、政真とあいつぐ死で、政真の親父定正が家督を継ぐ。

文明五年(一四七三)長尾景信が死ぬと、山内頼定は、景信の子景春をさしおいて、景信の弟忠景にあとを継がせた。景春は頼定の処置を不満に思い、背後の関東中・小武士を頼んで反乱を起した。武相の中・小武士は反上杉の旗色を明らかにして景春に加わった。相模では、小磯城(大磯町小磯)の越後五郎圓輝・小沢城(愛甲町)の金子掃部助・澁谷木城(厚木市)の澁谷木氏らであり、武蔵では、平塚城(北区)石神井・練馬城に關る豊島泰経・泰朝の兄弟およびその一族であった。



豊島氏は山内上杉氏の一族一房嫡一系室と歴代に仕えた武蔵における重臣である。一豊島宮城文書にもそれが記されている。それなのに景春方へ逃ったのは、太田氏への反感から山内上杉氏に反抗するようになったのではないかとも言われている。つまり、太田氏が尾形氏から賜る領地に、かなり豊島氏の旧領が含まれおり、次々侵食されていく不公平な処遇をうらみに思ったのだらうというのである。当時の中、小武士の次第に制圧されていく悲しさである。

文明九年(一四七七)四月十三日濃尾は泰明のこもる平塚城を攻撃。なかなか落城しないので城下に火を放つ。練馬、石神井城の泰経は、これを聞き城兵をもって平塚城の後詰めとして進撃。道灌は、三浦義綱、上杉朝景、千葉自胤らとともに駆進、これに応ずる。両者共に江古田・沼袋原で一大激戦となる。豊島方不弱となり、翌十四日、泰明以下原田、赤塚、滝野川、宮城、志村らの一族をはじめ一五〇人の戦死者を出し、兄の泰経はかろうじて石神井城にのがれる。道灌これを追い、石神井城を囲む。十八日、要害をくすすことを条件に相平交渉をするが、その後に行きついに、四月二十八日石神井城の外城を攻め落す。城兵は夜にまぎれて没落した。泰経は石神井城没落後、再び平塚城にたてこもったが、豊文明十三年(一四八二)正月二十五日、一日で落城。その後泰経は小机城に逃走したが、そのへんの消息はわからない。武蔵の名族豊島の宗家は名実ともに滅亡した。その旧領は太田氏のものとなる。

なお、豊島氏はこの戦いで完全に消滅してしまっただけではない。のち、小田原の北条氏に従い、さらに徳川氏に仕えている。豊島忠次という人は、八丈島の代官となり、二百石をもらい、寛永二十年三月十三日に死んで、その墓がいま鶴岡谷法明寺墓地にある。また給島・生島で知られる奥女中給島は、豊島氏の出であるという。

執筆者 後 藤 泰 部 (郷土史研究家)
 仲 田 壽 三郎 (区立津河谷中学校教諭)
 堀 切 康 司 (区立真和中学校教諭)
 伊 藤 栄 洪 (区立貝印中学校教諭)

表紙本文 宮 尾 しげ子 (画家・区府史研究家)

協力 豊島新聞社
 東京都立豊島高等学校

豊島図書館

郷土シリーズ・第1集

「豊島風土記」刊 引

中山道すじ

地名のおこり

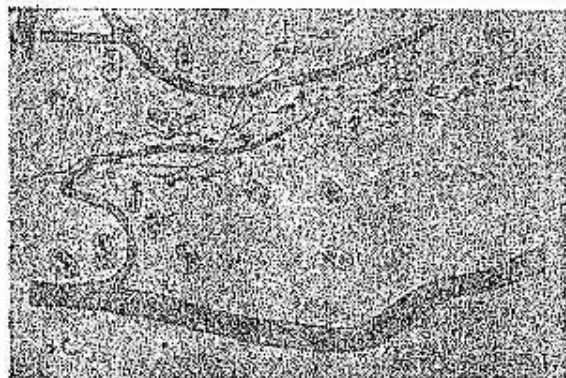
奥騨は中山道とともに築えていった土地である。記録には、ずいぶん古くからその名を見る事ができるが、往昔の奥騨は淋しいところであった。

古い時代の記録、たとえば「中興治乱記」「長祿江戸図」「小田原(北条)役帳」や、そのほか古地図、江戸幕府の記録などを見ると、洲賀茂、菅面、州鶴……などという文字を見ることが出来る。奥騨とあるのは「長祿江戸図」(五〇〇年以上も前のもの)くらいで、これはただ単に文字の音を合わせただけでなく、この土地の地形からその文字が使われたと考えることができる。「江戸会誌」にも、「菅面の字を得てその意義自ら分明なり」とか、「この村は石神井川に臨みし故、州鶴面(州にむきあったところ)の名ありとすとも坊げなし」と書いてあるが、中山道がここを貫くまでは、原野のおもむきがあったのである。

ここには石神井川、谷端川が流れ、流れのあちこちには州があり、沼や池もあり、そこに蘆が茂りあっていたのである。多少の起伏もあったから、古い地名に蘆が露とか、雲雀が谷などという名が残ったのである。人家はほとんど無かった。

奥騨の名が初めて記録に見えるのは「中興治乱記」で、今から六〇〇年の昔、芳流伊賀守高貞が時の室町幕府(足利)にそむいて兵をあげ、武州板橋原に陣をしいたとき、これを討とうとする上杉兵藤原憲將を大将とした軍が「その勢二千余騎、これも武州州賀茂という所に陣取」ったと書かれているが、つまりはそんな合戦の場にも、二千人余が野営するにもふさわしいような場所だったのである。太田道灌もその百年ぐらいいつと、この奥騨の地で平家頼朝に討った豊島泰明とここで戦っているが、水に恵まれたここは、兵を休めるのに絶対だったのであろう。

「奥騨」の文字が定着したのは、はっきりしていないが江戸も平ば以後と考えられている。「江戸砂子」の中に、名のいわれを「ここに大きな鶴があつて、鶴が住んでいたからだ」と、土地の人が伝えていたことが出ているが「江戸会誌」では「その説信するに足らず」として、この地の地形や、様子からきた名であると断じている。今では、合戦の趣とも、川の州のあとも、もうどこにもさがすことは出来ないが、奥騨はそうした古い土地なのである。



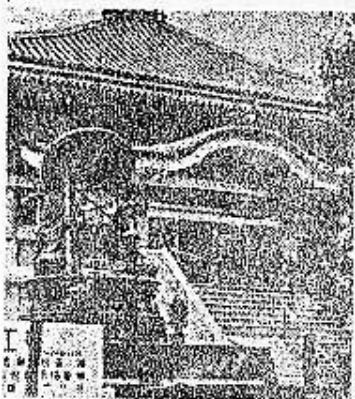
写真は「長祿江戸図」に見える奥騨村

中山道は日本橋を起点とし、本郷森川宿で岩瀬街道を分かち、北区滝野川より板橋宿へ入り、志村合の宿を経て戸田の渡しまで、板橋区の北側を通っている。終点京に至るまでの里程約百三十里(約五二〇キロ)六十九次がそのすべてである。

板橋宿は五街道制定により、品川宿、内藤新宿、千住宿とともに、江戸出入口をおさえる四宿の一つとして発展した。

現在の「なかせんどう」は「中仙道」を用いているが、「寛保御触書集」のなかの正徳六年(天保七年)の「道中奉行初野河内守申し渡し書」には中山道は山道とあり、このことから旧街道の用字に中山道を用いることとしていた。

眞性寺



眞性寺の江戸六地藏

中山道を江戸からくだる旅人は、果敢に入ると、左に唐銅づくりの地蔵を見つけける。「すがも町の左に地蔵あり」(新版諸國道中細見記)という、その地蔵である。江戸六地藏の一つで、一丈六尺、石の台座から中山道を行く旅人を静かに見つめている。江戸六地藏というのは、江戸からの街道口(たとえば品川(東海道)新宿(甲州街道)など)にそれぞれ同様の地蔵を六ヶ所安置したのでそうよばれるのである。街道口に置いたのは旅人や江戸市民の安全の祈願の意味であらう。中山道では眞性寺境内にある。

この地蔵は正徳四年(一七一二)に、深川の地蔵坊正元が建立したもので、後が重病にかかったときにその平癒を地蔵にすがり、平癒したのち、その感謝の心をおこめたものだということが「江戸六地藏建立縁起」に出ている。像の下部に刻まれた人名は「正元の志に応じて寄付をした人たちのものである。一説では八百屋お七の刑死後の吉祥寺の小僧吉三郎の後身が正元だとしているが、

「江戸妙子」に「この説虚なり」と否定されている。

この地蔵のある眞性寺は、医王山と号し、新義真言宗に属している。境内は二千坪を越え参詣人で賑わい、その門前町が許されていたほどである。本尊は薬師如来で、行基の作ったものと伝えられている。この境内には探衣庵二世梅人らによって建てられた芭蕉の句碑がある。句は「しら露も



眞性寺 (江戸名所図会)

「こぼさぬ萩のちねり説」で、碑の裏面に「このあはれにひかれて」として杉風の「萩樹てひとり見習ふ山路かな」の句が刻んである寛政五年（一七九三）のものである。ここにその句碑が建ったのは、こころが萩の名所だったからだという。

また、この寺の墓地に、三面を標山陽の墓詞文で埋めた「霞亭先生北条君墓」がある。霞亭は安政九年に生まれ、文政六年に



標山陽の碑文のある北条霞亭の墓

没した学者で、

森鷗外は、この山陽の墓詞文を追って、その晩年の史伝の一つ「北条霞亭」を著わしている。山陽の墓詞文は彼の絶筆となった文字である。だから、鷗外は「今少し世に知らるべきはずの金石文字である」としている。

真性寺も、いまは昔にくらべるべくもないが、かつては旅人が旅の安全を祈った地蔵の前には、きょうも善華が供えられている。

とげぬき地蔵尊

古老のお話では、かつての中山道は雨が降ると道がぬかり、雨んぼの中を歩くようですこぶる難渋したそうである。乾いていれば土埃がし、砂利道だから牛が荷車を曳いて通るのがやかましかったという。牛の奥く車はだいたい農家が下厩を漬んで行くものだった。

その中山道をさらに進むと右に「とげぬき地蔵」で有名な曹洞宗、万頂山高岩寺がある。この寺は明治二十四年にここに移ってきた寺で、奥の地の蔵といえはむかしは真性寺のそれをさしたのだが、今ではこの地蔵をさすほどに知られている。この寺は「御府内備考」に「往古、湯島御茶水あたりに阿寺まかりあり候。年代相知らず」と出ている。やがてそこから上野に移り、再びここに移ってきた寺である。

「とげぬき地蔵」のいわれは「越江戸砂子」に出ている。田村某という人の妻が病み、その夫に「実家の家系では女は二十五歳より長生き出来ないことになっているので、死ぬのをただ待っているのだ」と言うので、夫は驚いて目ごころから信心する地蔵にひたすら祈ると、夢枕に一人の僧があらわれ、「この御像を一万体、紙に写して川へ流せば病いはたちどころに平癒する」と告げるのであった。目が覚めると枕許に一寸三分の小さな地蔵があり、そこでお告げに従って一万体を写して浅草川に浮かせた。するとその夜、病人の枕辺にやせおとろえた男が立っているのを

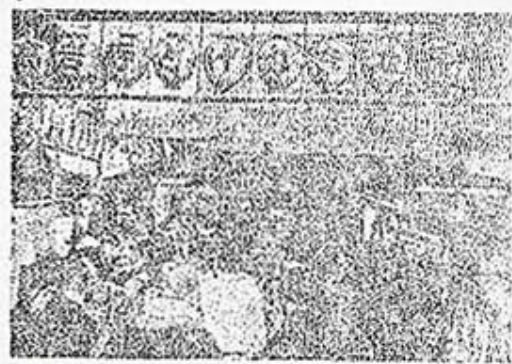


白鷗の句碑

くだんの僧が手にしていた扇杖で漁り弘うのを見たのである。病人は空欄から気符ち長くなり、すっかり金快することを得た。離空とるとなくこの話が広まり、民間、僧侶の言も、この印象をいざだくと病気が平癒するといふので、御座地蔵として有名になったといふことである。

田村某はこの印象を享保十三年（一七二八）に寺に奉納し、寺宝となったといわれ、この地蔵の御影を墨部に貼って祈願すれば病気の「とげ」を抜いてくださる、すなわち「とげぬき地蔵（延命地蔵）」として知られており、この御影が焼たれている。多くの人の信仰を集め、毎日の縁日は田中山遊は人で埋まる。

なお、この境内には補修された古い板橋が残されている。寛政十二年に雷殿和尚が地中から掘り出したもので、大永（寛町期）の庚申待枚塚である。彼岸には大永八年（一五二八）の文字が誌める。



高岩寺（とげぬき地蔵尊）のにぎわい

本妙寺

もとの御座地蔵に近く御坐山水妙寺がある。元龜二年創建という古い寺であるが、この地に移ってきたのは明治四十三年のことである。

この寺は有名な縁起大卒（明暦の大火）の火元となった寺としても知られている。火事は明暦三年丁酉（一六五七）正月十八日未の刻（午後二時）、本郷五丁目裏にあった本妙寺より出火し、



本妙寺の明暦の大火の供養塔

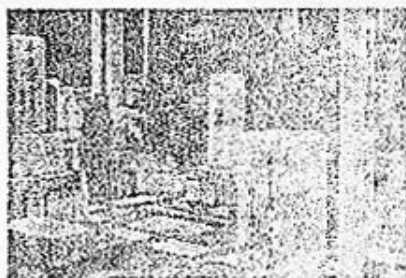
江戸市中ほとんどを焼失しつくしたのである。「武江年表」はその日の戦慄の記録を「この類焼、万石以上の御屋敷五百余宇、御旗本七百七十余宇、租屋敷数知らず、堂社三百五十余宇、町屋四百町、片町八百町、焼死十万余七千四百十六人といえり。去年十一月より当年正月に及ぶまで雨天なし。二十一日いたりて大雪降る。米価一時に高揚して、饑民の困苦甚しく道路に悲泣す……」と綴っている。乾ききって火のまわりが早かったのである。回向院はこの惨事のとときに建立された寺である。

前通橋内入ッ川路の火除地



る。すさまじい火葬である。そしてこの火葬の原因が、別荘した娘の嫁を供養のため焼いたところ、風にあおられて本堂の屋根におち、本堂を焼き、葬火していったのだというので、世に撮袖火事ともよばれたのである。

この寺には、直門世襲のころの名人の名をほしいさまにしたお飯坊代々の墓がある。即代遺業



代々木園坊の墓



浪山金園房らの墓



千賀周作の墓

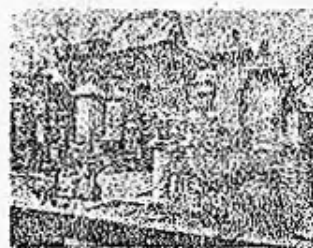
服下、官舎を遺しての名人といわれた弘化期の文和(十二代)秀榮(十七・十九代)方信社の創始者で、華快な秀前(十八代)をして、ついに直門世襲の最後の人となり、川原康成に「名人」というすぐれた作品を生ましめた。二十一代秀茂の墓が並んでいる。

また、撰談、映園、テンドなどで有名な御香判官こと浪山を御門尉景元(金園房)はか浪山家の墓がある。

この金さんが活躍したのは十九世紀半ばごろで、北町奉行祭二十代目である。この金園房の墓に隣あって、父(景晋)と妻の墓がある。

北辰一刀流千葉真作の墓がある。幕末に近いころに活躍した人で、神田お玉が他の文武道場はその門弟で賑わい、彼の千葉の呼称を得た剣豪である。

ほかにも幕府の老中職をつとめた久世大和守代々の墓、幕末のころに漢詞(盛沢)として活躍した浪山多吉郎(福沢翁吉の師でもある)の墓もある。浪山は幕府末期の外膳入りの通訳をつとめたが、すこぶる信用されていたという。



浪山藩主 久世氏代々の墓

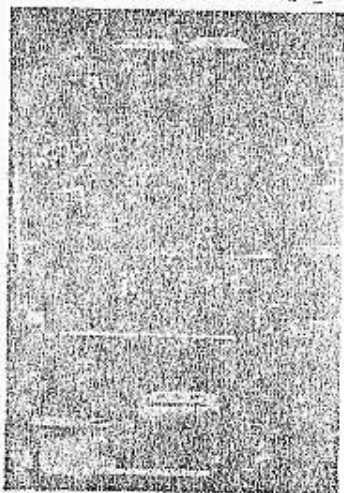
また、将世の天野宗夢の墓も見られ、ほかに、高村光登(光太郎の父)と並んで、江戸から明治にいたる影菊の伝統を守った竹内久一(希室枝葉員、美校教授)の墓などを数えることができる。

慈眼寺

柴井靈園に西接して日蓮宗の慈眼寺がある。後水尾天皇の元和元年（一一六一）創建と伝えられる寺で、むかしこの寺には司馬江漢の家になる竜の大作を描いた木堂天井があったというが、戦災で焼失してしまった。

境内に浦里・時次郎の比翼塚がある。浦里は吉原の遊女三芳野、時次郎は萩前の札差しの若旦那、伊之助のことだという。遊女と札差し。おきまりの悲恋心中であるが、新内「朝鳥夢泡盛」ほか人情本、歌舞伎、はては落語の人情噺にまで伝えられている。二〇〇年ほど前の話題の主人公たちである。伊之助の墓石に「一人きて二人つれ立つ二世の道、一つうてなにうける露の身」三芳野のに、「川たけの流るる身をもせき止めて二世の架りを結ぶうれしさ」と刻んであるのが、今になお哀れを深める。

比翼塚



墓地には司馬江漢の墓がある。維新・時次郎と時代をほぼ同じくした人で、その絵画、蘭学研究などとともに、当時においてはあまりにも進歩的な知識人である。この人の墓のとなりが、忠臣蔵で知られる吉良方の村人小林平八郎の墓である。また、「武蔵野話」の著者として、この方面の

芥川竜之介の墓



江漢司馬絳之墓



研究家として知られている斎藤鶴嶺もここに眠っている。芥川竜之介の墓がある。生前自ら設計したというその墓は、墓石の頂きに紋章がぎざまされて、何やら河童を思わせるものである。この文豪の墓地の手前に谷崎家の墓所があり、潤一郎の分骨、弟精二の墓も見ることができる。

庚申塚

中山道の宿場の間には立場というものがあつた。休憩のための場所として、簡易な茶屋なども出来ていて、人足や馬の世話もしていた。いまの庚申塚のところはその立場である。「江戸と名馬園」の絵を見ると、茶店には人も休み、人足の憩い合ひをしている人もいる。描きこぼれている人も多い。広重の描いた庚申塚の方が、人がけも少くまじい。

「この庚申塚は文龜二壬戌年（一五〇二）建立して、高さ八尺、その頃の河家屋もまはらなりしか、折り節は盜賊この碑の後ろに忍びて、往來の人に害有し」と「遊歴雜記」に出てくるが、塔が大きかったので、盗人も素にかくれることが出来たのであろう。

文龜二年の庚申塚はおいしいことに明暦の大火事（一六五七）のあと、ここに復興用の竹太などを置いておいたところ、ある日それが倒れてくだけてしまい、やむなく村人たちが相談してその塔の石を下に埋めて新しく塔を建てたのである。

庚申塚は、庚申信仰から生まれたものである。平安時代からはじまった民間信仰が、江戸時代にはずいぶん広まっていたようで、諸方でも庚申塔と書かれた石碑が辻に建てられているのを見ることがある。



今の振動庚申塚



庚申塚のあたりが広重の絵

海の花をきれいに咲かせたりするように、やはり文人たちもちよつとこへ足を伸ばしましたらしい。小林一茶も「煎餅に寝て見てもお江戸かな」などという句を作っている。のあたり、夢になちと葉の花がみことだったようである。



妙行寺

庚申塚のところから北区西ヶ原、王子にいたる道が、むかしの王子道である。飛鳥山から王子権現(豊島氏が紀州の熊野権現を勧請したもの)へ出ることができる。飛鳥道ともあるが花のころはここもまた飛鳥山に行く人の往来を見たことであらう。

いまの都電(古くは王子電車といつた)新庚申塚停留所から王子に向つて二、三分のところは日蓮宗、長御山妙行寺がある。妙行寺は越後本成寺の末といわれ、もと四谷飯河橋町にあったが、明治四十二年にこの地に移つてきたものである。お岩様の墓のあるので知られている。お岩様については、四世鶴屋南北の「東海道四谷怪談」があり、この芝居の初演(文政八年——一八二五)以来、幾度も再演されている。封建の世の男のエゴイズムに苦しめられる女の哀れを伝えるものである。

この寺の過去帳にはお岩様の没年が寛永十三年(一六三六)二月二十二日、伊右衛門がその二年後の七月二十二日没として記録されている。お岩様の戒名は得証妙念であつたが、田宮家に怪異が続いたので、当寺四世住職日蓮大徳が、その戒名を「得証院妙念日正大徳」と改め、お岩様の靈を慰めたという。五輪塔の墓石のまわりには、多くの卒塔婆が立ち並んでいて、その中には併役のものも見える。伊右衛門の戒名は無念即正禪定門である。

このお岩様の墓所の手前には桃野長矩侯夫人清泉院の供養塔を見ることもできる。

この妙行寺の前に、「左、岩屋弁天」ときざんだ道しるべが建てていたのだが、いつのまにか失われてしまった。嘉永七年頃の「登井王子奥賜辺繪図」にも記されていた道しるべである。ここを通つて、人は岩屋弁天に詣つたのであろう。岩屋弁天とは、青無川にそらがけのところにあり、かつては多くの信者を集めたものである。不忍池がかつて旱池にあつたとき、その池の甍がここに来て身を休めた、といういい伝えも残つていて、この岩屋弁天の甍の上は紅菱寺として知られる金剛寺があり、江戸のころはそれらをたよりに行業の人がここを歩いたのである。道しるべはそのためのもので、四〇〇年も前のものだという。



お岩さんの墓

乾山（善養寺）と新門辰五郎（盛聖寺）の墓

妙行寺となりの善養寺も明治四十五年（一八七四）に下谷善養寺町から移ってきたもので、善王山と号し、天台宗上野寛永寺の末寺である。天長年中（八二四—八三三）に建寛大願がひらかれた寺であると伝えられ、寛永年間（一六四四—一七〇四）に上野山内の北側に移り、享保三年（一七二八）には門前町を許されるほどだったことが「御府内備考」に見える。「江戸名所図会」では運慶の作による開闢大王像があると記されているが、天保のころに焼失したらしい。現存のものは天保年間のものである。

この寺の墓地に緒方（尾形）乾山の墓がある。碑面に、「放逸無慙八十一年一月春却沙界大千」とあって、「憂きこともうれしき折も過ぎぬればただ明け暮れの夢ばかりなる」の歌が、「寛海深省居士」として刻まれている。雲龍とも深省ともなつていたのである。乾山はその号で、幼名は楢平、光麻の弟、才れた陶工として、陶家としても知られた逸話の多い人である。この人の没年は寛保三年（一七四三）六月二日、八十一歳のときで、のち酒井逸一（播州姫路城主酒井忠尚の次男、俳句、画をよくし、また陶器もよくした）は、乾山の遺徳を忍んで、「乾山深省遺」を建てた。碑文を読むと、乾山の墓の知られていないことを惜しみ、世に知らしむるためだといっている。おおよそ、十九世紀はじめごろに建てられたものらしい。



尾形乾山の墓

寺にはまた新門辰五郎の分骨がある。分骨は田村家墓に納められている。辰五郎（一八〇〇—一七五）は、江戸末期の火消し「を組」の頭から十番組の頭取となった男で、明治維新のころ、よく徳川氏のためにつくし、江戸の民衆の人気を集めたのである。町人の心意気の代表といえる。

板橋

鳥羽伏見の戦いに敗れた将軍慶喜のため、大坂城から大仏の將軍馬印をとりもどしたり、上野の彰義隊のために食糧を運んだりした。それが真山青果らによって悪化されたり、講釈師の張り扇で伝えられていったのである。

この人の墓は善養寺にはど遠からぬ西真鴨の盛聖寺にある。盛聖寺は下谷から大正元年に移ってきた。



新門辰五郎の墓

近藤勇

昔の彼は、日本橋から出発して昌平橋を渡って本郷三丁目から東京大学候学部前に出ます。ここに森川宮という名の宮がありました。ここまでは中山道と昔横徳道が重なり合っていたわけですが、中山道はここから道を左へとり、奥の陣の奥の陣の奥でひと息入れた旅人は坂橋宿へたどりつくわけですね。

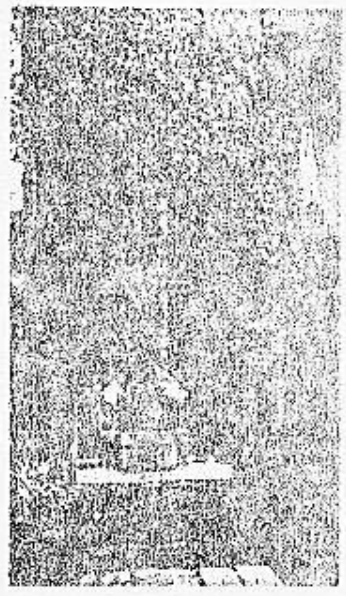
ひとくちに坂橋宿といっても、宿場の中は三つの組に分れ、坂橋宿の東の入口ともいえるのが平尾宿で、(坂橋一、二、三丁目)これについて中宿(宿宮)、さらに上宿(本宿)となり、宿場の全長が十五丁四十九間(約一、七〇〇メートル)もあったものです。

この平尾宿入口の目安となっていたのが平尾の一里塚でした。この塚は江戸中詰ごらには木は無く土の丘だけになっていて、現在の坂橋宿と北区との境附近にあたる所で奥物屋さんのある地点、上板橋からの都バスが坂橋駅東口方面へ曲る所あたりです。中山道の両側に向い合って一対の塚があり、北側の塚のそばから壬子道が走り、分岐点に達するべの石杖が建って壬子、流不動、千住方面への道路になっていました。又南側の塚のわきには幕末の脱獄組員近藤勇が首を切られた板橋刑場があった跡の場所だったようです。現在では遺するべは遠野川の重吉稲荷の境内へ、刑場の近藤勇の墓は坂橋駅東口前に移されております。

明治元年四月二十五日、慶応四年五月二十五日、近藤勇は板橋刑場で処刑された。現在の滝野川三軒家、当時は板橋平尾と云った。これが板橋刑場である。其の場所は現在の板橋駅東口に当る。

この土地は滝野川斎場寺と云う寺の地内であり、勇の墓は板橋東口駅前を出て、駅前広場の向側にある。後に、久保田勘六と云う人が近藤勇の処刑された土地の側に、私立秀林学校と云うのを建てた。然しそれは寺小屋式であった。

近藤勇が処刑された時、立合人として名三郎代蔵川十左三門と云う人が居た。いよいよ処刑されると云う時に近藤勇は、「首を刎ねられた後も見苦しくない様に、床屋を呼んでくれ」と云い鬘を剃らせたと云う。



東光寺という浄土宗のお寺がある。昔はもつと奥の方の舟山という所にあつたのが、この奥一帯の地が加賀百万石の前田家下屋敷に当てられたため街道近くの地に移されたものです。寺は御殿にあらつたが石造文化財だけは原形のまま残つています。寛文二年に造られた辰申塔、これは佛では見られぬ立派な彫刻で青銅金剛を主題に二重の四夜叉、一層一層の浮き彫りに威風凛々な雄大な塔です。真中にこれ又壮大な地蔵尊、これが平尾追分の三角点にデーンとすえられていたものでしょう。一番奥に有名な秀吉の朝鮮の役の總大将でもあり東西分け目の戦いともいわれた関ヶ原の戦の大振方の總大将宇喜多秀家の墓があります。秀家は幕府に捕えられ八丈流人の第一号として彼の地で亡くなり、その子孫が明治三年に内地帰還を命じられて東京へ帰つて来ました。内地不案内な一同は先づ秀家の姻戚前田家を頼つてその下屋敷の一部に安住の地を求め、この墓を守りながら、荒地開拓をした跡が、先に述べた淨土、八丈の地名の由来です。東光寺の奥北園高松付坂の前田家大御門から北方二十一万七千九百坪（約七十二万平米）の広大な地、後の第二遊兵隊營にあたる地域が下屋敷の跡です。



宇喜多秀家の墓

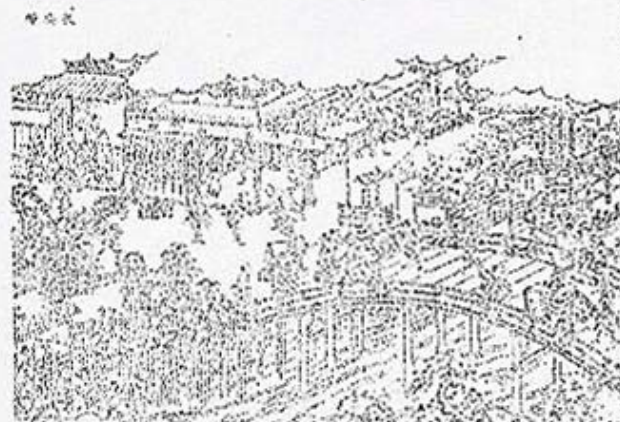
親明寺

「あ、こんなところに辰申塔が……」これは眞宗親明寺の墓塔で、東光寺のものに比べいくらか丈が低く、四夜叉はありませんが建立した年は寛文元年ですから一年先になります。これは東京都内でも数百年のものに属しましょう。庚申とは干支（えと）の回りで六十日又は六十年に一回をわつてきます。この夜ねむると墓の中の三尸の虫が口から出て天へ昇り、天の神にその人の罪だくみを報告するといひ、その夜合に死したと見られるといふ中国の思想から来たもので、この夜は壁夜として身をつつしむ鼠に三尸虫を封じるわけです。親世安塔を祈つて建てたものがこの塔です。この親明寺も富永時代から信仰の厚かった寺ですが、最も栄えたのは明治六年頃に成田不動の分身をお迎えして、住職が身銭を切つて東京近辺の露天神を遷し縁日を隔かせた時からでしょう。城北の露天市の皮切りといえます。又境内に享保年間につつた懸崖縁下の石祠があります。子供があばたにならないよう母親が慈願をこめたことでしょう。また明治になってここへ移したものでしょうが、もと加賀藩が下屋敷の中に会にあかして建立した出世福徳の社があります。お堂の地の彫刻などまことに異事なものです。

板橋 本陣跡 南馬場本

旧藩右側の東電オービスセンターの場所は旧家
飯田家の分家である飯田九門次家の邸跡、この邸
の土も開墾場投入として南馬場跡のあった人です
が、これと小路をはさんで飯田本陣飯田新左衛門
家の跡跡とつづきます。本陣といえ、大名だど
か外使などのような身分の高い人の指定ですか
ら広大なもので、延暦九十七年(約三百二十平米)
もあつたといわれます。この邸はさいわい板橋
大火に災をまぬがれたのですが、戦後の明治二
十二、三年頃大火で焼けてしまいました。本陣制度
も実質的には江戸末期までで、明治初期は長い間
借の借作で本陣宿をいとなんでいたようです。で
すから維新の際東山道軍先鋒徳川義興が中山
道を押し進んで板橋宿に到着し、飯田家を本陣と
したのですが、もうこの邸は財政的にもかなり衰
微してはいたのではないかと考えられます。今商家
に保存される岩倉公から寄附されたと伝える黒漆
竹の障子の柄は、岩倉公滞在の黒漆川に公が道具
の入れ替えをせざるを得なかったのではないかと
想像されます。

しかし江戸時代には宿場本陣といえは火に焼けた勢
力をもっていたものでしょう。焼け残った文北田
の中には越後高田藩主藤原武部大輔や堀丹波守な
どの宿泊した日、西側に建てた唐礼、大名の使節
が持つて歩いた旗立櫓なども保存され、また皇女
和宮が宿泊したことは静寛院宮日記にも書かれて
います。



板橋 (江戸名所図会)



板橋

この先にある板橋区名にまでなつた板橋です。
この新干線はコンクリート造りですが表面に木目
を表わし木材まがいに彩色もされ、わずかですが
昔の本陣宿をしのびすうに頷をえがいていま
す。

この橋は下を流れる石村川が板橋本陣跡の
産先で急カーブで左折しているため、大雨がふり
ますと溢れがはげきれず溢れ、よくはらんしま
した。そのため志方では浮遊船的な新橋を造りこ
の方に水の溢れを食い止めた。昭和四十七年
に新田河方の用なみにかげかえたのがこの橋で
す。江戸時代の板橋は三本づつ五徳の板橋を河
中に架けてはげたが渡され本陣跡干がゆるやかな
円を描くように作られていました。江戸名所図会
のさし絵や広重の錦絵によく表わされています。
その後明治初めころには首の橋の形と少しかわ
り橋脚が直線に近いものに改造されていたよう
です。この本陣の板敷も昭和七年に災なれコンク
リート橋に架けかえられて来たものです。

この橋とこの橋のつなぎの地点から新川原に
右に抜け道が出ていますが、そのつけねのところ
に「題 日本橋二番二十五町五十九番」と書いた
石碑が建てられています。これは宿場時代、新
川原近くの橋台に建てていたものを移して、いく
らかでも昔の面かけを感そうと建てられたもので
す。

問屋跡

道は石井井川に向つて下り勾配になります。右側に築屋跡がみえ、その先二軒程の一面が区画されています。ここが宿場の横濱にあたる問屋跡の跡です。ここへ名主や本陣の主人が交替で出勤して懸立の事務をしました。ですから懸立所ともいいました。幕府の公用の御用や幕府の使役の人の乗りかえ席の世話、大名や一般庶民の旅に必要な人夫や馬の世話から大名の宿泊所の御用など宿場内の行政事務を扱っていたのです。板橋宿にはすでに説明したように五十匹の馬と五十人の人夫をかかえて、旅人の要求に応じて供給しました。この人馬が不足するときは人馬先取という旗手紙を特約の村々へ廻して所要数をかき集めて用意されました。これが助郷人馬です。松崎を隔される村を助郷村といっていました。この板橋宿問屋跡の建物は百目散所に併用されました。この仕事も問屋役人が兼務ですから大変だったと思われまふ。これは人馬の使用を適正にするためと過重労働を防ぐ意図合いもあったものでしょう。

問屋跡跡の斜め向いの下総屋は昔の辻堂所あるいは自身番と呼ぶ今の交番にあたるものです。下総屋の横町へ入りますと、このあたりは大木戸宿役人の役宅があったところです。

山山遊

遊を中山遊へ引きかえし、丁字路を一旦坂を登ったところから絶えず小流が中山遊と十字路を形づくるところに薬師のスイバーがあります。ここへ水門三三三が宿場の名所御宿のあった地点です。左からくる小流は先刻御宿で見た中流水の下流にあたり、用水を地立てたあとで、以前は湧のあった境内の端を用水が流っていたわけです。

さて、横濱の地名について二軒のいい伝説があります。その一つは、古くから板(エンノ木)と藤の一種の板(ツキノ木)が双生していたためエナナ板から、縁が切れるとの縁柄が生れたという説と、今一つは、享保年間、江戸の本郷(文京区)で油屋を大火にいとんでいた伊藤新助が、少年時代から心にきめていた富士山の登り道を切りひらいて、富士山上で死にたいという決心をいたしましたため、よく大なる御宿もすて、奥さんと三人の縁にさとして富士への旅立ちを告げましたが、御宿は泣いて中止するよう強くせがみました。身障はかたく心に誓ったことだからと旅支度して中山遊御宿の大きな横の下まで来たとき、あとを追ってきた家旗がおいつき指をとらえて將え直してくれと懇願しました。身障は家旗を小舟にかかせる猪の瀬干に腰かけさせ、自分の決心は変らぬ、夫

御宿子の縁も切られてくると、よくよく聞き、泣きすぎる妻と飯を喰らひとり中山遊を直へ向つて旅立ったのです。身障は富士山頂の山姥を走り抜き、七合目で死にました。こんなしい話から御宿が生き別れの場を渡っていたことを縁御宿と名づけ、妻子を嫁かきさせた石橋、「なみた橋」その下を流れる中流水を「おん山」と呼んだといわれます。今は川は埋められ、なみた橋(岩の板橋)も取こわされて跡かたありません。

このような由来から、いつの間にかこの横の下を嫁入りや婿入りの行列が通ると必ず不潔な所景になるとおそれられていました。又江戸時代というのは女性はいつも男性に虐待されて、いました。従つて夫婦にしましても、妻が夫に愛を注ぎつかし離婚したくても、夫の了解がなければ絶対に許されなかつたのです。こんなとき、女はひそかにこの横に願をかけ、覆の橋板をけすつておちかえり、そつとお茶や酒に入れて飲ますと不思議に夫から連絡がなすが持ち出される、という。とで遊歴な女性の覆掛りが流行し、宿場名所として見物客のための橋茶屋まで出ていたようです。ここはいわば江戸時代女性の救済の史跡でもあり、女無災史の中にかすかに一つの光明を投げかけた信仰の対象でもあったわけですね。

湯親子の縁も切つてくれるよう、よくよくさと
し、泣きながら妻と腹を腰にひとり中山道を行き
へ向つて旅立つたのです。身縁は吉吉吉吉口の葦
山崎をきり船き、七合目で死にました。こんな悲
しい縁から親父が生き別れの場を置つていた大権
を縁切親と名づけ、養子を置かひさせ七石橋を
「なみな橋」その下を流れる向附水を一筋引出し
「川」と呼んだといわれます。今は川は埋められ、
なみな橋(岩の坂橋)も取こぼされて跡かたもあ
りません。

このような出来が、いつの頃からかこの種の下
を嫁入りや婿入りで行列が通ると必ず不慮な能
果に落ちとおそわられていきました。又江戸時代と
いうのは女性はいづる男性に虐待されて、いまし
た。従つて夫婦にしましても、妻が夫に愛いそを
つかし難くしたくても、夫の愛がなければ夫婦
に許されなかつたのです。こんなとき、女はひそ
かにこの腹に腹をかけ、腹の樹皮をけずつて待
ちかえり、そつとお茶や酒に入れて飲ますと不慮
縁に夫から離婚はなしが持ち出される、というこ
とで悪徳な女性の悪徳りが流行し、宿場名所とし
て見物客のための掛茶屋まで出ていたようです。
ここはいわば江戸時代女性の救済の史跡でもあ
り、女性歴史の中にかすかに一つの光明を投げか
けた徳川の到来でもあったわけでは。

この古物ある所も、初代の木は明治十七年の大
火に焼け、二代目も徳川の太さに育つた時、土肥
所有者によつて切られました。この時の株木職人

は皆不慮の災にあり、傾のたたりと他人たちは袖
をおそる腹を泣いています。

このような徳川と徳川を極めた徳川も時代の
うつり変りにまかれます。徳川が走り弘まれる
こととなり、かつての徳川の対象であつた後の結
木も徳川物あつかいとなり、あわや荒土製で焼
却されるまで、その一部を置かされたものが国立
博士資料館に展示され、そのまた一部が徳川をへ
だつた板新三小学校前に町の入びとにより小社
をいとなまされその史料となっています。なおその
後、徳川をへた徳川させたため、この徳川は三代
目と四代目の徳川をへた徳川とされています。

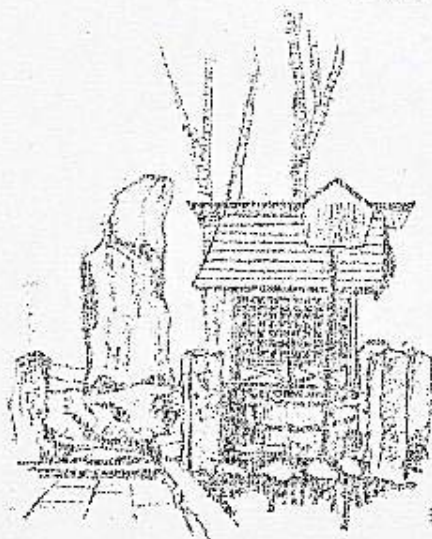
文政二年(一七四九)徳川家の徳川五十五、文
化元年(一八〇四)育物屋の徳川五十五、文

徳川の家計、徳川のもつて徳川入りの徳川には、日
徳川長の徳川徳川、李徳川長の徳川徳川、
徳川の徳川徳川が公武合体の徳川となつて、十代
徳川徳川に徳川の徳川、徳川徳川の大木の徳川から
徳川まで徳川つづみ徳川ないよりにして中山道を徳
徳川徳川に入られたなど徳川の徳川を現し、徳川
の今日まで、また徳川の徳川をあつめています。
徳川に建てられた徳川に

徳川のいとのむすぶもとくも人にあり

徳川あらは徳川徳川

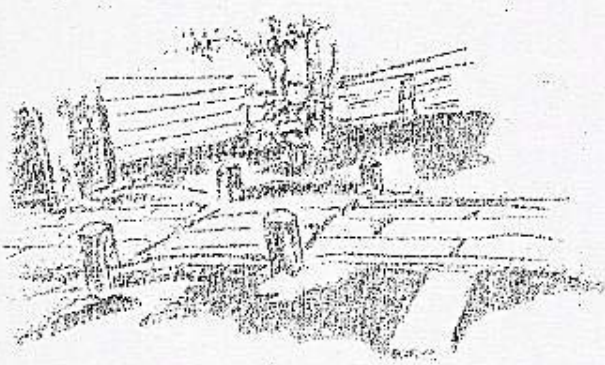
徳川徳川 末



徳川切

御道十七町を渡ると隔もなく電光山聖清寺の河
 前にたどりつきます。この寺は浄土宗で、弘明榮
 印寺御寺のの一つとして五若の霊地を新里から渡
 けた格式高い寺でした。正門の前に小さなみかげ
 石の橋の真横が目につきませんが刻んである築設年
 次の正徳二年というのは六代將軍家宣の治世で
 す。これは大正年間まで板橋橋はじつ上十條村か
 ら稲村・赤羽・岩瀬・土倉・神宮・高河の七ヶ村
 の藩政助成であつた中用水にかけられた津橋で
 す。中用水について明治五年のことですが新橋が
 が水を取り過ぎるので下の七ヶ村にまわつてこな
 いと百姓が水争いをし、あわや血の雨が降らうと
 したことがありました。この事件の解決は八ヶ
 村から毎夜湯釜を出し、この寺の蘭所を足橋に渡
 越し水臭まわりをした農民史の主張をのぞめた川
 です。大正十一年頃まで水田は寺の別荘一帯にひ
 ろがり田毎の月の養ひきは格別であつたといわれ
 ています。山内のお徳院本尊は鉄仏で丸息仏の内
 の一休ださうです。表通りの路傍の土壁に祀られ
 ていたと伝えられています。江戸名所図会にも書
 かれていた大關秀吉の守り神といわれた額吉稻荷
 は本堂前に祀られ赤い稲荷がはためいていま
 す。墓地には上宿名主板橋家歴代の墓があり正面
 左の宝徳阿塔が始祖正重の墓と思われまふ。この
 他板橋三・四丁目・加賀町の親近番小松了徳、西
 治中期の文人相沢系の孫などがあります。
 聖清寺から南へ二・三分で五輪寺です。この寺戦
 災の時山門を焼して余は全部焼け、最近鉄筋コン
 クリート造りの本堂が落成しました。寺はめずら
 しく真言律宗です。焼け残つた山門には築翁松原

定信の書いた九字の御願寺の扁額が本堂に懸け置
 かれた感じがかかげられています。本尊が聖徳太子
 ですから愛が慈に響きが通じるところから江戸近
 県の信仰業者の傍侍のあつてお寺です。八代將軍
 吉宗の子、三郎の一人田安宗義が中興したといわ
 れ、岡家やご三家からの寄進の宝物が多数ありま
 した。これも御願寺で失ない、今は相模平の
 「蓮」記念碑や動物業者の記念碑だけが残つて
 います。戦争前には蓮花寺橋の橋を築くも本尊が数
 本をびえていたと伝えられています。門前からは
 江戸へ向つた五十町、築宮が縁切橋を築かせわり
 道して通つたのがこの世です。



中用水渡橋

板橋区教育委員会発行
 「いたばし風土記」第17集 別冊

記
 寺

豊島区遺跡散歩地図

豊島区教育委員会



遺跡散歩	
A	皇白塚—皇白塚—千代田 金栗塚—高島塚—西島
B	池袋遺跡—西島塚—西島天 才塚—高島塚—西島
C	皇白塚—高島塚—西島 西島塚—高島塚—西島